



「明日も学びたい」

いわき市教育委員会学校教育推進室
学校教育課長 鈴木 路 人

授業の魅力について考えてみたいと思います。

授業は、児童生徒の将来の選択肢を広げるための学力向上の場、「自己肯定感」や「自己有用感」を高めるポジティブな生徒指導の場、互いに認め合い、支え合う関係づくりの場、児童生徒一人一人が大切な存在として尊重される場など、魅力がいっぱいです。

私たちは、児童生徒が、ワクワクするよう発問を通して、魅力ある授業づくりに取り組んでいるところですが、さらに、スパイスが必要に感じます。

「主体的・対話的で深い学び」「個別最適化された学び・協働的な学び」の実現が求められている今、教師主導の授業も学びの場では必要なことがあります。今後は教師主導の授業スタイルの脱却に自ずと向き合うことが必然的なようです。これまで築いてきた授業の財産に加え、児童生徒が主体となる授業の展開に切り替える時期に来了。

教師主導から、児童生徒主体の授業に展開するために、教科指導と生徒指導の一体化について、その基盤となることに触れてみます。

- 自己存在感の感受を促進するために、児童生徒が授業における賞賛や励ましを受け、さらに、互いに認め合う関わりがもてることにより、学習意欲が喚起されることにつながります。
- 児童生徒の自己決定の場を広げるためには、自ら考え、選択し、決定していくような学習活動が必要です。さらに、学習活動において、自己決定させることで、決定したことに対しての

責任について、考えるよい機会にもなります。

- 教室が安心して自分の考えを発表できる場になっていることは大切です。そのためにも、児童生徒一人一人が大切な存在として尊重される学級の風土づくりが重要です。できれば、学級間の差が大きく生じないようにするためにも、学級の風土づくりを学校、学年といった組織で取り組むことが理想です。

- 「楽しい・やってみたい・分かる・できる」と実感することができる、児童生徒のための授業づくりは、教師の醍醐味です。

今年度は、学校を訪問し、授業を参観する機会がありました。ICTを活用している授業が多く見られ、児童生徒の興味を喚起する取組みに感心しました。今後は、さらに、児童生徒が主体的に思考したり、対話的な活動により自分の考えを深めたりするためにも、ICTを効果的に活用することが大切であることも感じました。

また、これからの教科指導を進めるに当たっては、生徒指導の機能を十分に生かしていくことが求められており、このことにより学力向上や学習意欲の喚起が期待できます。そのためにも、生徒指導が、何か起きてからの対応だけではなく、児童生徒のよさや個性を伸ばすための、ポジティブなものであることが重要だと感じます。

児童生徒や先生方にとって「また、明日も学びたい」「また、明日も教えたい」「また、明日も学校に行きたい」と実感できる教科指導、生徒指導を目指したいものです。

<視点 A> Activity 様々な体験活動・学習支援活動の推進①

「教職2年次研修」社会体験研修に参加して 小名浜西小学校 教諭 松本 瑞希

教職2年次研修における社会体験研修は、企業での体験を通して、社会人としての見識や幅広い視野を養い、教員としての資質向上を図ることを目的として行われました。私は、学校現場とは異なる環境のサービス業に関心をもち、パレスいわや様に研修を依頼し、体験をさせていただきました。企業と学校を比較する視点で臨みました。

研修当日は、和装での挙式を予定している方の前撮りがあり、ヘアメイクや綿帽子の付け方を見学しました。新郎、新婦の前撮りでは、アテンドの体験をしました。新婦さんの水分補給や送風、補助を任せていただきました。他にも、お客様のお出迎えやご案内をするインフォメーション体験や、披露宴会場の準備を行いました。どれも細やかな気遣いが必要で、難しさを感じました。

今回の研修を通して、どの方もこまめに連携をとられており、企業として1つの目標に向かっていくためには、とても大切なことであると気付きました。学校現場でも同じように、一人一人が信念をもって連携をとり合っていくことの大切さについて考えさせられました。また、社会人や教員としての在り方を再認識し、仕事への取組みを振り返ることができたことが大きな成果となりました。企業の方のお客様への配慮や、各々が役割を明確にもって、積極的に働きかける姿を見て、役割を果たそうとする懸命さや、堂々と取り組む自信が感じられ、教員2年目の私にはまだまだ足りないものがあり、課題であると感じました。

ある従業員の方が、「この仕事は、人が幸せになっていくためのサポートをする仕事で、式の後も長く付き合いのあるお客様が多く、とてもやりがいがある」と話されていました。子どもたちの将来を願って、どのような支援やサポートができるかを考えていく教員の仕事にも、共通しているところがあると感じました。私自身も、この教員人生にやりがいを感じながら、誇りをもち、勤めていきたいと強く思います。従業員の方々は日々仕事のスキルを高めるべく、ソムリエ等の資格習得にも励んでいらっしゃるそうです。私自身も、初心を忘れず、教員としての資質を高めるべく、学び続ける教師であろうと思います。

キャリア教育講座から

「今もっているキャリア教育のイメージをすべて忘れて、私の話を聞いてください。」

これが、キャリア教育講座の講師、東北福祉大学教授の長田徹先生の最初のお言葉でした。講義ではキャリア教育とは何かについて、動画視聴や演習を交えながらわかりやすく説明していただきました。長田先生がおっしゃった、キャリア教育を実践していく上での4つのポイントは以下の通りです。

1 「学び」を自己の将来につなぐ。

これまでの「学び」が今の自分に、今の「学び」が将来の生活や職業に繋がっていることを児童生徒に言葉として伝えることが重要である。

2 資質・能力を身に付けるための目標を設定する。

将来の生活や職業に就いた時に必要な資質・能力を、大きく4つの「基礎的・汎用的能力」としてまとめた。それを身に付けるためにも各学校の現状に合わせて「キャリア教育で目指す児童生徒像」を具体化し、目標を設定することが必要である。

3 特別活動を要として、各教科を関連付ける。

中学校理科の授業と学校行事の防災教育を例に挙げると、今学んでいる「大地の変化」が、避難訓練などにおいて命を守る大切さに繋がっていると気付かせる。このように、学校行事などの特別活動を要として、将来必要となる資質・能力を定着させていく。

4 生き方を考え、主体的に進路を選択する。

自分のよさや可能性、学びの繋がりを実感し生き方を主体的に考え、進路の選択をする。その1つのツールとして「キャリア・パスポート」（いわきっ子チャレンジノート）がある。

長田先生は、キャリア教育とは、今の学習と将来の職業、過去・現在・未来の自分を「繋ぐ学習」であるとおっしゃっていました。児童生徒の将来のためにも、学習活動を通して学びの繋がりを実感させ、「基礎的・汎用的能力」を身に付けていく活動を行っていきましょう。

<視点 A> Activity 様々な体験活動・学習支援活動の推進②

外国語科における小・中学校の円滑な接続に向けて

7月13日(土)・14日(日)に小学生を、11月9日(土)・10日(日)に中学生を対象にした「English Immersion Camp」を開催しました。この行事は「ALTや他校の児童生徒とのコミュニケーション活動を通して、外国の文化や多様な考え方に触れ、国際社会の一員としてお互いを理解することの大切さに気付かせる」ことを目的に実施しました。グループの仲間やALTとのコミュニケーションを通して、思考力を働かせながら英語を使っている児童生徒は、真剣な表情の中にも笑顔があり、活動が進むにつれて、自信に満ち溢れていくのが分かりました。

このように英語の学習にひたむきに取り組む児童生徒を育成するためには、小学校外国語科・中学校英語科の連携は大切な要素の一つです。そこで、小学校外国語科と中学校英語科のよりよい連携の方法について考えます。

1 相互理解と情報共有を図る。

小中学校の教員が互いの授業を参観し、指導内容や方法を理解することが重要です。可能であれば定期的な合同研修会を開催し、ALTの活用や効果的な指導法について意見交換を行うことも考えられます。

2 指導内容を改めて確認する。

小学校では中学校英語への接続を意識し、音声中心の活動に加えて、アルファベット等の基本的な文字指導も取り入れます。中学校では、小学校で培った音声面でのスキルを活かしつつ、読み書きの指導を段階的に導入していくことが求められます。

3 ALTを効果的に活用する。

ALTには、言語活動における英語でのやり取りのモデルとしての活用が効果的です。さらにALTとともに小・中連携を意識した教材や活動を開発することもおすすめです。

今年度8月より、原則として同学校区の小・中学校にALTを配置しました。中学校基幹校から近隣の中学校・小学校を訪問して、小学校外国語活動・外国語科、中学校英語科の授業を支援しています。小学校外国語科と中学校英語科の円滑な接続を図り、ALTを効果的に活用しながら、児童生徒の外国語教育の充実を目指していきましょう。

学校図書館の充実

「図書館」とは、すべての人の「知る権利」を保障することを目的とする機関であり、図書館の役割は、求める人に求める情報・資料を提供することであるといえます。

「学校図書館」も同様の役割を有し、学校の教育目標を踏まえながら、児童生徒が生涯を通して図書館を利用しながら自分で情報を集め、自分の頭で考え、自分で判断・行動しようとする学習者としての基盤を育成する場となります。

また、学校図書館は、授業の場に限らずあらゆる場面で、図書館の機能を基盤に資料提供を通して、児童生徒の好奇心を喚起するとともに、どこまでも疑問を追究できるような環境を整えることを目標としています。これらの実現に向けて現在小学校59校、中学校34校に対して、42名の学校司書が勤務し、各校の司書教諭、図書館教育担当教員と連携を図りながら、各校の読書活動の推進等に取り組んでいます。

昨今の教育の動向からも、「探究的な学び」が注目され、子供たちの情報収集の重要な拠点として、学校図書館の役割はますます大きくなっています。その役割を達成していくためには、これまで以上に教員と学校司書との連携を深めることが重要となります。

9月に実施した「図書館教育担当教員研修」においては、担当教員と学校司書による協働型ワークショップを行いました。学校図書館の機能の充実に向けて「誰が、どうやって実現させるか」という視点で様々なアイディアが出され、それらをもとに対話がなされました。教員がもつ教科の専門性、児童生徒理解、授業実践力という強み、学校司書がもつ情報資源、情報検索、読書指導の専門性という強みを、お互いに確認することで、連携の在り方についての具体的なイメージを共有することができました。

読書活動や探究的な学びへの支援など、持続可能な学校図書館の取組みを目指して、市総合教育センターでは、今後とも研修を通して図書館教育担当の先生方、学校司書を支援して参ります。



<視点 B> Base「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善

「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業づくりのために

学習指導要領で示された3つの資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組んでいくことが求められています。具体的な姿として、文部科学省の資料には、以下の例示がされています。

「主体的な学び」の視点

- 見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業に
- 自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業に

「対話的な学び」の視点

- 周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業に

「深い学び」の視点

- 一つ一つの知識がつながり、「わかった！」「おもしろい！」と思える授業に
あくまでも授業をよりよくしていく例ですが、本質は「授業をよりよく改善していき、児童生徒の資質・能力をしっかりと育む」ことです。
そのために、私たちができることはどんなことか、再確認してみたいでしょうか。

【教師一人一人ができること】

- 問題（課題や事象、資料等）のイメージを掴んだり、問題に積極的に関わりたくなったりする働きかけをしましたか。
- 児童生徒がつながり合う働きかけをしていますか。（教師の発話を減らし、子どもの声を生かす努力をしていますか。）
- 学びを振り返り、本時に働かせた見方・考え方のよさを実感する働きかけをしていますか。

【学校全体で取り組むこと】

- 学校で目指す児童生徒像を共有し、同じ方向を見て現職教育等を推進していますか。
- 互いの授業を見合い、児童生徒のよい姿について語り合っていますか。
- 授業の在り方について自由な雰囲気の中で語り合う学校文化の醸成はできていますか。

いわき市の児童生徒の夢実現に向け、センターの研修も活用し「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組んでいきましょう。

ICTの効果的な活用に向けて

2020年から「GIGAスクール構想」が始まり、本年度、一人一台端末の「配備が完了」が文部科学省より報告されました。その間、先生方のタブレット端末の活用頻度や活用の仕方も増加・多様化し、「効果的な活用」を目指した数多くの授業実践が積み重ねられてきました。

近年では「ネクストGIGA」という言葉も耳にするようになりましたが、これまでとの大きな違いは「個別最適化された学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と相まって、「ICTの効果的な活用」の主語が「教師」から「児童生徒」へとシフトチェンジしている点です。教師自身のICT活用のスキル向上は必要不可欠ですが、それ以上に、児童生徒が自らICTを使う場面を意識的に選択し、それを活用することを通して自身の学びを深めようとする力、いわゆる「情報活用能力」のさらなる育成が求められています。

では、授業の中で「情報活用能力」をどのように育成していけばよいのでしょうか。今年度参観した2つの授業を紹介します。

1つめは、グラフ作成ソフトを活用して比例のグラフを作図し、それを基に反比例のグラフの特徴を捉える中学校数学科の授業です。生徒は式、表、グラフを関連付けながら、どうすれば視覚的にわかりやすい資料ができるのか、数値や目盛りを変えて試行錯誤しながら取り組みました。

2つめは、ある歴史的出来事をプレゼンテーションソフトにまとめる小学校社会科の授業です。教師が出来事に関する重要語句を提示し、その詳細については児童がタブレット端末を使用して情報を収集・整理し、まとめます。まとめる際の分類方法や思考ツールは児童が選択し、どのようにまとめて表現すればよりわかりやすいか、グループで話し合いながら協働的にまとめました。教師は個々の学習活動を机間巡視や端末の管理画面で掌握して、適宜支援と助言を行っていました。

紹介した授業の共通点は、ICTを「効果的に活用」しているのは児童生徒、そうした学習環境を整え児童生徒の学びを支えるのが教師、という点です。この視点をもって授業実践を重ねることが「ネクストGIGA」への第一歩です。

<視点 B> Base 教職員のライフ・ステージにおける研修の充実

初任者研修から

令和6年度の初任者研修は、4月11日（木）の一般研修①からスタートしました。所長の冒頭のあいさつに対し、緊張の面持ちで「おはようございます」と返す初任者の様子から、入り交じる期待と不安が手に取るように分かりました。

校内研修時間が100時間（前年度比－20）になった今年度でした。指導力向上に向けて継続的に寄り添い、励ましながら、各校で時数減を補って余りあるほど質の高い初任者研修を展開していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。初任者にとってとても心強かったことと思います。

センターや協力校における校外研修では、教員として必要な資質・能力を、専門的立場の各講師及びセンター所員から学びました。初めは、研修内容を受け入れる一方だった初任者も、問いをもち、自分や目の前の児童生徒に当てはめて考え、実践に向けて主体的に研鑽を積む姿への変容が見られました。研修後は、研修会場を原状復帰する自主性も見られ、研修を「受ける」意識から、研修に「参画する」意識へと変わっていきました。

今年度の実態として、学生時代をコロナ禍で過ごした初任者も多いせいか、研修感想に「いろいろな先生方と話したい」「様々なグループ編成で研修できるのが楽しみ」「経験ある先生方との協議が勉強になった」等の声が毎回聞かれました。一人一人の子どもに個の力を身に付けさせる上でつながりを重視し、時に周囲に助けを求める力が必要であるという認識の初任者が多いです。

一年が経とうとしています。初任者は学びを積み重ねることで、人間力や指導力を身に付け、逞しさも増してきました。「初志貫徹」や「初心に返って」の思いに駆られる場面では、あの瞬間に立ち返り、横のつながりを生かしながら前進しています。目の前の子どもたちのために学び続ける先生方を、これからも皆で支えていきましょう。



ミドルリーダー養成研修（カリマネ・組織マネ）に参加して 勿来第一中学校 教諭 小野 優子

カリキュラム・マネジメント講座では、教育課程の編成は、管理職だけでなく全ての教職員が参加し、学校・地域の特色や課題、生徒の特性を見極めR-PDCAサイクルを活かしながら、改善を図ることが重要であることを学びました。グループ演習の際には、ある単元配当表をもとに総合的な学習の時間を軸として教科横断的に配列された教育課程についての検討を行いました。例えば、「どんな人たちが町に住んでいるのか」をテーマとして、社会科の単元の「日本の地域的特色」や道徳で学ぶ「あいさつ（礼儀）」、「住みよい社会（社会参画、公共の精神）」を意図的に同時期に配列し、生き方や生活に結び付けることで深い学びにつながることが分かりました。中学校の教員は、他教科との学習内容の横断的な関わりを十分に把握できていない場合があるので、全職員で学習内容の全体を見通し、教育活動を「つなぐ」という意識をもって、教育課程を編成しなければならないことを感じる演習となりました。

学校組織マネジメント講座では、「大熊町立学び舎ゆめの森」の実践について拝聴しました。予測困難な時代を生き抜く子どもたちに身に付けさせたい力を明確にし、「主体的、対話的で深い学び」と「個別最適な学びと協働的な学び」との一体的充実を実現できる教育へと変革する必要性を感じました。また、学び舎ゆめの森では、「自由進度学習」を取り入れ、ICTを活用することで個別最適化された学習者主体の学びが進められており、私たち教員は、型にはめた一斉教育ではなく、子ども一人一人に応じた学びへと意識改革を進めていかなくてはならないと強く感じました。

1年間の研修を通して、学校は児童・生徒のあるべき姿を基に、地域と連携しながら、一つのチームとして教育を実践することが未来を生き抜く子どものためになることを学びました。

ミドルリーダーとして、研修で学んだことを校内で共有し、協働的な組織となるよう、リーダー性を発揮し、学校の活性化に取り組んでいきたいと思っています。

<視点 C> Care 児童生徒理解と対応の充実①

不登校対策から ～多様な学びの場の整備について～

1 教育支援センター「チャレンジホーム」

チャレンジホームでは、不登校状態にある児童生徒の学校復帰や社会的自立に向けた支援を行っています。

今年度は、市内で5か所目となる内郷チャレンジホームを開設するとともに、全てのチャレンジホームにWi-Fiを配備しました。通級する児童生徒が抱える不安の一つに「学習の遅れ」が挙げられますが、持参したワークブック等に加え、インターネットでの調べ学習やGIGA端末内のアプリの利用など、自分に合った学習内容や方法を選択しやすくなりました。「自分で決めた内容に取り組み、最後までやり遂げた」という達成感や、「わかった」「解けた」という喜びが自信になり、心のエネルギーとして少しずつ蓄えられていることが、通級する児童生徒の表情や言動から感じられます。



内郷チャレンジホーム

2 学習支援ルーム

不登校対策事業の一環として、今年度より、いわき総合図書館の一室を、小・中学生が利用できる「学習支援ルーム」として開放しています。事前登録は不要で、図書館開館日の10時から17時45分まで開放しています。「いつ来てもいつ帰ってもよい居場所」として、平日は指導員1名が一人一人のニーズに合わせた支援や相談を行っています。

これまでに利用した児童生徒は、読書をしたり、持参したプリントの問題を解いたり、Wi-Fiに接続したGIGA端末を使用して学習を進めたりと、自分のペースで時間を過ごしていました。

今後も、児童生徒や保護者、先生方などの声を聞きながら、児童生徒が安心して過ごすことができる、よりよい「居場所」にしていきたいと思います。



学習支援ルーム

生徒指導研修の充実

「子どもの命を守れますか？」

5月27日(月)に行われた生徒指導主事研修で、講師の八並光俊先生(東京理科大学 教授)が研修者に投げかけた言葉です。生徒指導提要のデジタルテキスト作成者・編集責任者も兼任されている八並先生は、各学校で生徒指導の中核となる研修者に対し、使命感と責任感を促すような言葉かけをしながら、生徒指導主事としてあるべき姿を示してくださいました。生徒指導に関わる関係者全員に対するメッセージも含まれており、生徒指導に関する校内体制の構築と、それが機能していくことの重要性を改めて痛感させられました。

当該研修は、中学校区を基本とした配席で実施しました。研修者同士顔が見える関係を築き、地域の実態を共有しながら進められました。県との共催に位置付けられた研修でもあり、県教育事務所や市教育委員会から、県や市の生徒指導(不登校、いじめ、虐待・DV等)の現状とその改善策等が話され、研修者はいわき市の特徴を明らかにした上で協議を重ねました。不登校の現状を数値で示した場面では驚きの声も聞かれ、研修者は自分事として捉えるとともに危機感を伴いながら、自校や地域の実態に置き換えて考えていました。

本年度は、生徒指導主事研修のほか、市総合教育センターにおいて次の研修も行われました。いずれも、生徒指導の実践上の視点「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」に深く関わる内容を取り扱いました。

○カウンセリング研修

講師 市こころの支援アドバイザー 榊絵里加

○不登校対策講座(前期)(後期)

講師 FR教育臨床研究所 所長 花輪敏男

○いじめ防止対策講座

講師 東京成徳大学 特任教授 石隈利紀

○心の教育講座

講師 親と子のサポートセンターふくしま

公認心理師 能渡綾菜 他

○学級経営講座

講師 教育実践研究家 菊池省三



研修会

＜視点C＞ 児童生徒理解と対応の充実②

発達障がい教育講座から

本講座は、「LD・ADHD等の発達に課題がある児童生徒の困り感を理解し、通常学級においてどのように支援すべきか、学校と関係機関の連携をどのように進めるべきかについて研修を深めること」をねらいとし、発達支援室ひだまり室長の齋藤忍先生から「多様な学びの支援～分かる・できる・楽しい授業づくり～」という演題で講義をしていただきました。

講義の前半では、学校現場において、児童生徒の診断名を明らかにすることに注力するよりも、どのような援助を必要としているかを重要視すること、具体的な指導の手だてを考え、実践すること、学校でできることを具体化し、実践し、子どもの成長を見取って保護者に伝えていくことが大切であると教えていただきました。

講義の後半では、教室の中に多様性をもつ児童生徒が存在することを前提として、学習方法・教材教具についてあらかじめ様々なオプションを準備する先取りの支援が「ユニバーサルデザイン」の考え方であることを学びました。また、問題行動は児童生徒からの「困っている」「助けてください」のメッセージであり、そのメッセージにいち早く気づき、支援方法を考え、子どもたちに提案し選択させ一緒に取り組んでいく中で、自分に合った学習スタイルの獲得、自己理解・自己支援力の獲得につなげていくことについて理解を深めました。

受講者からは、「様々な特性をもつ児童生徒のことで悩んでいたのが、今回の講座において障がいに対する知識や捉え方を学ぶことができ、貴重な経験となった」「児童生徒の困り感をきちんと把握することがよりよい支援につながることを再認識できた」という感想が出されていました。

最後に齋藤先生から「教室の中には多様性があるとともにどの子にも学び成長する権利があり、『分かるようになりたい!』『できるようになりたい!』と思っている。」というご指導をいただきました。これらのスキルを私たち教職員が身に付け実践していくことが、これからの教育現場では必須であると改めて感じました。

教育研究発表会

＜第1部 分科会について＞

教科部会および教科外部会の全8部会の調査研究委員が各会場に分かれ、1年次の成果と課題を発表し、参会者と協議を行いました。

教科部会は、①「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を推進し、児童生徒の資質・能力を育むための単元構想の工夫、②「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のための指導の在り方や効果的なICT機器の活用工夫、③児童生徒の道徳的判断力や道徳的心情、道徳的实践意欲、道徳的態度を高めるために「考え、議論する道徳」の在り方、の3点を重点課題とし、授業実践を通して各教科における「見方・考え方」を活用した学びの具現化を図る取組みを発表しました。

また、教科外部会では、本市が抱える喫緊の課題に対して、それらの解決に向けた組織的な指導・支援の在り方、授業及び学級活動、学校行事等における支援の在り方について発表しました。

各会場において、調査研究委員の発表をきっかけに、市内の先生方が自分事として熱心に協議する姿が見られました。

＜第2部 全体会について＞

第2部の全体会では、国立教育政策研究所研究企画開発部総括研究官の千々布敏弥先生を講師に「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた教師のリフレクション」と題して、ご講演いただきました。千々布先生は「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、学校の組織文化を再構築していく重要性について触れ、授業研究でのリフレクションを通じた同僚性の構築や教師一人一人のエージェンシー（主体性）の向上といった具体的な方略についてご紹介いただきました。

参会者からは、「子ども一人一人に個性があるように、教師にもそれぞれの教育観がある。個性を尊重し合い、コミュニケーションを図りながら教師自身がエージェンシーを高めていける、学びの共同体になっていきたい」「『教師が想定した学びが広げれば広いほど、子どもたちは自由に学ぶことができる』という言葉が印象に残った」など、これまでの教師観、学校観、授業観を振り返り、柔軟な姿勢で再構築していこうとする前向きな感想が多く寄せられました。

研修調査室の重点

令和6年度から、本センターにおいて「研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励」の効果的・効率的な実現に資するよう、研修の申込や受講履歴記録の作成を一元的に行う「全国教員研修プラットフォーム『Plant』」の運用を開始しました。

研修受講については、管理職と当該職員が「対話」を繰り返す中で、教師が自らの研修ニーズと、自分の強みや弱み、今後伸ばすべき力や学校で果たすべき役割などを踏まえながら、教師が探究心をもちつつ、自律的に学ぶこと、主体的に学びをマネジメントしていくことが求められています。

令和7年度の研修においては、これらの「研修観の転換」に向かって、自分事として捉えられる演習や協議を効果的に取り入れるとともに、参加しやすいオンライン形式による研修を拡充し、次のことに重点を置き、研修の質を確保して進めて参ります。

1 主体的に学べる教科指導等研修の充実

「授業改善講座」「授業実践講座」などの教科等研修において、先生方のこれまでの実践を振り返り、今後の教科等指導の在り方を考えることのできる協議の場を効果的に取り入れ、教師自身が探究的に学べるように研修をデザインしていきます。

2 多様な教育課題に対する研修の充実

教育課題研修に「働き方改革講座」「学級づくり講座」を新設し、また、生徒指導研修に「児童生徒理解講座」「学校教育相談講座」を開設するなど、教員の課題意識に対応し、専門的な知見を深める講義と演習等を通して、各種の指導力の向上を目指して参ります。

3 調査研究委員会と教育研究発表会の充実

第9期の2年次として、令和6年度の課題を検証・改善し、実践研究をさらに深めます。また、発表会の形式をオンラインに変更し、参加者のニーズに応じて研究の成果を複数選択して受講できるようにします。

「新たな教師の学びの姿」を目指し、積極的に本センターの研修を活用願います。

教育支援室の重点

いわき市における、義務教育段階の直近3年間の教育相談件数、不登校児童生徒数は、増加傾向にあります。一方、家庭環境に目を向けると、経済的な困窮を起因とする課題が多様化・複雑化している傾向が見られます。また、市全体の児童生徒数が減少する中、支援を必要とする児童生徒数や児童生徒の支援に関わる相談件数も増加傾向にあります。

このような現状から、より多様化・深刻化する教育課題に対応すべく、教育支援室では、担当指導主事4名、アドバイザー2名を中心に「相談支援体制の構築」「特別支援教育に関わる人材の育成」「地域とのつながりを生かした支援」の3点を重点として取り組んできたところです。課題の改善・解決は、個々別々の努力だけでは困難であり、一朝一夕で成し遂げられるものではありません。地域社会全体で知恵を出し合うとともに、ウェルビーイング（個人の多様な幸せと社会全体の幸せ）の実現という目標に向けて協働していくことが求められています。

これらを踏まえ、次年度は以下の2つを重点として引き続き教育課題の改善に取り組みます。

1 地域と協働した相談・支援体制の構築と充実

学校や家庭における相談支援ニーズは、引き続き高い状態にあります。一方、本市は各地区に有用な支援者・事業所等があります。教育支援室を活用して学校の支援体制構築を推進することはもとより、多職種連携により課題の改善・解決を目指し、児童生徒が学校や地域で生き生きと過ごせる環境を整えます。

2 支援に関わる教育人材の育成

市内小中学校の特別支援学級担任の数は210名を超え、うち新担任は50名以上となっています。また、支援員は160名以上の配置となっており、継続した指導者・支援者の養成が課題です。そのため研修調査室と連携し、教員研修や支援員研修、サポート訪問、教育人材育成プログラム会議等により、児童生徒本人の認知行動特性の理解を広めるとともに、気持ちに寄り添える人材の育成を推進します。